

もつとのびやかに
いい加減に

女優
高畑 淳子



たかはた・あつこ 1954年香川県生まれ。桐朋学園短大演劇科専攻卒業後、青年座入り。舞台女優として活躍し、文化庁芸術祭賞個人賞、読売演劇大賞女優賞などを受賞。また、TVドラマや、バラエティ番組などにも活動の幅を広げている。TVドラマ『3年B組金八先生』には養護教諭役として出演中。現在、東京・日比谷のシアタークリエにて、舞台「放浪記」に出演中（1/7～2/6）。

■子ども時代

母に言わせると、いっさい手のかからない、非常に明朗快活ながんばり屋だったそうです。

父の仕事の関係で、小学校時代は、四国中を毎年のように5回も転校しました。それだけに、自分から心を開いて、友達をどんどんつくらざるをえない状況でした。ここで失敗しても次でがんばればいいか、みたいなところもありましたね。

あとは、筆箱の中の鉛筆が長い順に並んでいないと気が済まなかったりとか、9時に寝なさいと言われていたのに、9時に布団が敷いてなくて大泣きしたりとか……几帳面だったんでしょうね。

■親として

やっぱり自分の子どもはかわいいですよ。それは事実ですね。正直何かあったら、自分の子を一番に助けに行きます。でも、どのお子さんも、どれかのお子さんなんですよ。それをどうして忘れてしまうんですかねえ。

うちの子が保育園のとき、よく引っかき傷をつけて帰ってきていました。やられやすい子だったんです。やったほうには伝えてあるのか、保育園に聞きに行ったら、「それは保育園の中のことなので知らせていません」って言われて、言い合いになったことがあります。今だとモンスターペアレントって言われちゃうのかしら……。でもその後、うちのおばあちゃんが、その子のおばあちゃんにあけっぴろげに言ってましたけどね。もつとのびやかに、いい加減にルーズさがあって、お互いさまという気持ちで子育てできないかなと思います。言ってあげることもその子のためになるんですから。私は、他のお母さんたちと、何かあったら教え合いましょうと、情報交換してました。子どものいろんな面が発見できてよかったですよ。

■いじめ

うちの息子を、一度、TV『踊る！さんま御殿!!』に出したら、ネット上にばーっと書き込みされたことがありました。なかには「死ね」というのもあったんです。先生が心配して、消しましよかって言ってくれたんですけど、消してもらいませんでした。言われたり、言ったりすることはあるんです。言う人は言うんだと、打たれ強くならないうと。人間ってむごいことを言ってしまうたり、

したりすることってあるじゃないですか。先生だって親だって、いつも情緒が安定しているわけではないですから。子どもにはかわいそうだと思いますけれど、私なんかはテレビでも好き勝手言っていますので、「うちの母ちゃんは変わってるんだ」と言い放てるくらい、たくましくなってほしいですね。

■子育て奮闘記

息子が小学校のとき、先生に学校に来るなど言われたことがあったんです。「じゃあ行かなくていいじゃない」と、学校を休ませて公園を2人で散歩しました。そしたら息子が、「今ごろは体育だなあ」とか、「国語かなあ」とか言うんです。そこで、ルールを破ったら罰があることを教えたかったんです。とてもいい経験になりました。

でも、そこで怒っちゃうお母さんがいるんですよ。「何でうちの子だけ！」って。でもそれはなしにしてほしい。それがその子の経験値になるって、おおらかに考えてほしいですね。怒られたっていいじゃないですか。学校でみんなの前で叱られることで、ふまえなければいけないルールを覚えたりしていくんです。間違えたときにそれをヒントにして、次につなげていくのが人生なんです。

ただ、それを教えていくのは大変なことだと思います。私も今、子育て真っ最中ですが、ほんとうに骨が折れます。叱るからには、叱る倍の愛情がないと叱れないでしょ。子育てって答えがないですし、免罪符や「人って3回書いて飲み込んだら、舞台であがらない」みたいなものはないかなってよく思います。働いているお母さんの子育てはほんとうに大変ですよ。だけど、しんどければしんどいほど、後の充足感があります。

先生も、人が相手の仕事ですから、思いっきりかかわって、相手が変わってくれたときに喜びがあるんでしょうね。人を育てるという仕事は、資源の少ない日本においては、何よりな仕事だと思います。誇りを持ってがんばってほしいですね。

上の娘も教師を志望していたんですが、今は演劇をしています。でも、先生になろうという人は、一度演劇をされたらいいと思います。人の心をつかんで、空気を読み、パフォーマンスをしながらおもしろく授業を組み立てていくというのは、演劇と共通項が多いのではないのでしょうか。うちの

娘が、もしかしたら教師になりたいと思っても、今の経験は少しも遠回りではないと思っています。

■養護教諭の役割

『金八先生』で養護教諭役を演じるにあたって、最初どう演じようか悩みました。でも、学校って、教育って、子育てって何だろうって考えているうちに、どう演じるかじゃなくて、自然とドラマの中にいられるようになったんです。学校の中の養護教諭の役割というの、「いる」ことではないかと思うんです。いてくれるだけで何だか暖かいという、経験があって、経験値ゆえの緩みと、いい意味でのいい加減さがある感じ。そういう人が学校の中に1人いてくれたらいいなと思います。

「養護＝生きる力、考える力」だと思います。健康で、きちんと食べてきちんと寝て。そのおおもとを見落とさないように、自分の生活も反省しながら演じています。

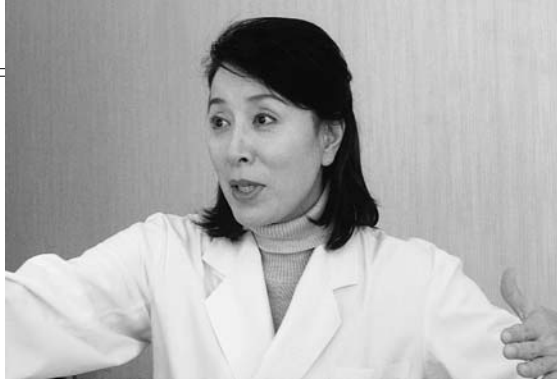
■実は健康オタク

100歳になっても舞台に立つというのが夢ですね。年取ってまで若い役をやるのではなく、年相応のきれいなおばあさん役をやりたいですね。それまで足腰立つように健康には気をつけています。できるだけ素材のいいものを体に入れて、朝ごはんには五色五味を摂るよう心がけています。

あとは、プールに行ったり、息子の中学校まで走ったりしています。中学校の表札をなでて、息子のことをお願いして帰ってくるんです(笑)。

■『金八先生』の、ここを見てほしい！

前2作はドラマチックで過激な路線でしたが、今回は生徒それぞれの日常を追うような内容です。親子で一緒に見ながら、話をするきっかけにもらえたらなと思います。私も普段、面と向かって子どもと話せないで、テレビを見ながら話をするようにしています。みなさんにも、うまく活用してほしいと思います。(談)



いじめの 本質とは何か？



北九州市立大学教授 楠 凡之

いじめの諸相

いじめという現象をここでは大きく3つの視点から考えてみたい。

1つ目は、おそらく社会的に最もよく知られている「異質性の排除」としてのいじめである。軽い発達の遅れのある子どもや、アスペルガー障害などの発達障害があり、言動に特異さがある子ども、また、家庭環境が厳しく、衣類の管理などが行き届いていない子どもなどが「異質性の排除」としてのいじめの標的にされる場合が多い。

しかし、小学校高学年ごろになると第二次性徴の早い子どもや、教師から見た「よい子」が「異質な存在」としていじめの標的にされる場合が増加してくるにも留意する必要がある。

2つ目は、一見すると仲よしの関係、依存関係の中に自分の内的葛藤が激しく投げ込まれていくいじめである。例えば、女子の「私的グループ」の中で、ボスの子どもがあたかも順番のように「仲間はずし」や悪口などのいじめを行っていくのがその最も典型的なものである。そして、このようないじめは、目に見える暴力はなくても、今まで自分が友達だと思っていた相手からのいじめであるため、激しい見捨てられ感や裏切られ感につながり、いじめを受けた子どもに深刻なダメージを与えるものになってしまうのである。

なお、このタイプの場合、両者の力関係が逆転し、いじめの加害者と被害者の立場が入れ替わる場合がしばしばあることにも注意が必要であろう。

3つ目は、携帯メールやインターネットの学校裏サイトなどを利用して他者を攻撃するいじめであり、近年、急激に増加してきている。インターネットの場合、直接に相手に向けられる場合よりもより深く個人の病理が引き出され、激しい攻撃

性が表出されてしまうことも指摘されている。

そして、これらのいずれの場合も、いじめを受けた子どもが他者や社会との“つながり”を奪われて孤立無援状況におかれたときには、深刻な心的ダメージを与えるものになってしまうのである。

いじめ加害者となる子どもの心理

①自分の抱え込みきれない葛藤の表出

子どもたちは自分の中の生きづらさや傷つきを自分の中に引き受けられないとき、それを他者への攻撃性として表出せざるをえない。今日、大人社会の中で大人が抱える生きづらさや疎外感が、家族内の弱い他者に向けられてドメスティックバイオレンスや児童虐待の深刻化をもたらしているが、家族の中では被害者の立場におかれ、傷つきを抱えた子どもが学校の中では加害者の立場になっていく事例はきわめて多いのである。

②他者支配による自らのパワーの強迫的な確認

いじめの心理の背後には、他者を貶め、支配することで自らのパワーを確認しようとする心性がしばしば存在している。そして、その根底にはその子どもの自己肯定感の弱さがあり、それがゆえに、他者を支配することで自分のパワーを強迫的に確認し、自らの無力感を否認していくのである。

真の意味での自己肯定感をもっている子どもが執拗ないじめを続けることはない。しかし、重要他者との関係で弱さや不完全さをもった自分を受容されず、責められ続けてきた子どもの場合、他者の弱さや不完全さを受容することは困難であり、かえって他者の弱さや不完全さを攻撃するいじめを頻繁に行ってしまうのである。

③発達のエネルギーを発揮する生活世界の剥奪

さらに、いじめを生み出す最も本質的な要因として、子どもたちが発達のエネルギーを発揮していきける活動と人間関係の剥奪の問題が存在している。子どもたちの自立の過程にとって必要不可欠な、「発達の源泉」となる活動と人間関係が奪われていることが発達のエネルギーの屈折した表現をもたらし、いじめを生み出していくのである。

今日、階層格差の拡大に伴って経済困難階層の生活基盤は大きく破壊されており、一部の生活困難家庭の中には何重もの社会的不利が累積し、児童虐待や家庭内暴力、アルコール依存や薬物依存などの問題が蔓延する状況さえ生じている。

しかし、この「発達の源泉」となる活動と人間関係の剥奪の問題は、決して一部の階層の問題ではなく、現代社会を生きる子どもたちに広範に覆いかぶさってきている問題であることも十分に理解されるべきであろう。

少年期でいえば、同性の仲間集団で徒党を組んで群れ遊びの世界に興じるのは、かつての時代であれば、ごく普通の光景であり、その中で仲間集団の中に心理的な居場所を築きつつ、そこを拠点として大人から自立していく力（「集団的自立」の力）がはぐくまれていた。しかし、放課後の子どもたちどうしの「つながり」が弱まり、また、学校だけでなく、放課後の生活世界までが大人によって管理・統制されていく中で、子どもたちは「集団的自立」の過程を自治的に展開していけなくなっている。その結果、行き場を失った発達のエネルギーは集団で誰かをからかって楽しむ「いじめ遊び」という形で表出されてしまうのである。

このように、子どもたちの発達のエネルギーが現代社会の中で適切に発揮できる通路を奪われていくとき、一方では他者へのいじめや器物破壊などの行為として表出され、もう一方では起立性調節障害（OD）などの心身症や、リストカットなどの自傷行為として、すなわち、自分の心と身体へのいじめとして表出されていく場合が少なくないことには十分に留意されるべきであろう。

いじめ問題への指導上の課題

①生きづらさから「つながり」をはぐくむ指導を
いじめとは、子どもたちが他者との「つながり」を切実に求めながらも、子どもたちが生きてきた

社会的な関係性の歪みを反映して、しばしば、「支配—被支配の関係」、また、お互いを傷つけ合う関係性になってしまっている現実を反映したものである。それだけに、子どもたちが、自らの傷つきや生きづらさを他者への攻撃として表出してしまう状態を乗り越えて、お互いの生きづらさと弱さを表現し、応答し合うことを通じて、他者との人間的な“つながり”を築いていきけるように援助していくことが何よりも重要になってくるのである。実際、いじめをしていた子どもが自分の抱えていた悩みや傷つきに気づき、それを他者に共感的に理解されただけで、いじめから離れていくことができる場合も少なくないのである。

また、そのためにも、子どもたちが自分の抱えている弱さや不完全さを否認するのではなく、そのような弱さや不完全さをお互いに表現しつつ、そこからお互いを支え合える関係を創造していくことが重要になってくるのである。

②子どもの自立の過程を保障する活動と

人間関係の実践的な創造

さらに、いじめという表面的な現象にとらわれず、少年期の「集団的自立」の過程を展開していきけるような文化活動と人間関係を保障していく取り組みが、より根本的なところでいじめを克服していくうえでは重要であろう。言い換えれば、子どもたちの「発達への権利」を保障する取り組みを抜きにした「いじめ対策」はすべて対症療法的な取り組みにとどまるといえるのである。（楠：2002）

今日、学力向上の名のもと、さまざまな学校行事を縮小していく方向に向かいがちである。しかし、子どもたちが多様な活動に全身で参加していくことを通じて、子どもたちの発達のエネルギーが他者や世界に“つながって”いく力として発揮される通路を奪い取っていくことは、子どもたちの発達のエネルギーを内攻化させ、ますますいじめ問題を深刻化させる結果につながりかねないことは十分に理解されるべきであろう。

くすのき・ひろゆき 1960（昭和35）年大阪府生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士課程を経て現職。専門は臨床教育学。主な著書に『いじめと児童虐待の臨床教育学』（ミネルヴァ書房 2002年）、『気になる子ども 気になる保護者』（かもがわ出版 2005年）など。

加害者・被害者をつくらない 心の健康教育

～データから見る養護教諭の活動～

全国養護教諭連絡協議会会長
茨城県水戸市立三の丸小学校養護教諭

折笠 慶子



1. 全国養護教諭連絡協議会について

全国養護教諭連絡協議会は、養護教諭の職務等について研究し、養護教諭の資質を高め、学校保健の向上に寄与することを目的に、全国の53研究会、約3万人の会員で構成されている。

本会では、毎年職務に関する調査研究を実施し、児童生徒の健康相談活動や保健室登校、教職員や保護者との相談活動、児童虐待の対応、特別支援教育等について実態把握に努め、会報や会誌『瑞星』等で結果を報告し、健康教育推進のための資料として活用を図っている。

また、養護教諭の専門性と力量の向上をめざして、「保健学習」「カウンセリング」研修会や研究協議会を開催して、養護教諭を支援している。

2. いじめと養護教諭の役割

★中教審答申（平成8年7月19日）

・いじめ・登校拒否の問題……養護教諭は、いじめの兆候に気づいたり、いわゆる保健室登校の子どもへの指導にあたりたりするなど、その役割は大きい。

★教養審答申（平成9年7月28日）

・養護教諭の養成カリキュラムの改善……「健康相談活動」「養護概説」
・養護教諭が保健の授業を担当することが可能に。

★保体審答申（平成9年9月22日）

・養護教諭の新たな役割……カウンセリング機能の充実、健康相談活動、課題解決の指導力・企画力・実行力・調整能力の養成、現職の一貫した資質の向上

★中教審答申（平成10年6月30日）

・「心の居場所としての保健室」の役割を重視…養護教諭の健康相談活動（ヘルスカウンセリング）

平成7年の学校保健法施行規則の改正（文部省事務次官通達）の要旨の中で、「近年、児童生徒心身の健康問題が複雑、多様化してきており、特に、いじめや登校拒否等の生徒指導上の問題に適切に対応するとともに、児童生徒の新たな健康問題に取り組んでいくためには、学校における児童生徒の心身の健康について指導體制の一層の充実を図る必要がある、保健主事、養護教諭の果たす役割が極めて重要となっている。このため、保健主事に幅広く人材を求める観点から、保健主事には、教諭に限らず、養護教諭も充てることができることとした。また、これにより、養護教諭が学校全体のいじめ対策等においてより積極的な役割を果たせるようになるものであること」とあり、さらに文科省は来年度から、退職した養護教諭による「スクールヘルスリーダー」の派遣事業を新設し、心の健康教育への環境整備の充実をめざしている。

養護教諭は、保健室に来室する児童生徒への対応の中で、いじめなど心の健康問題にかかわる兆候にいち早く気づくことのできる立場にあることから、その職務や保健室の機能を十分に生かした健康相談活動を行うことが、今、求められている。

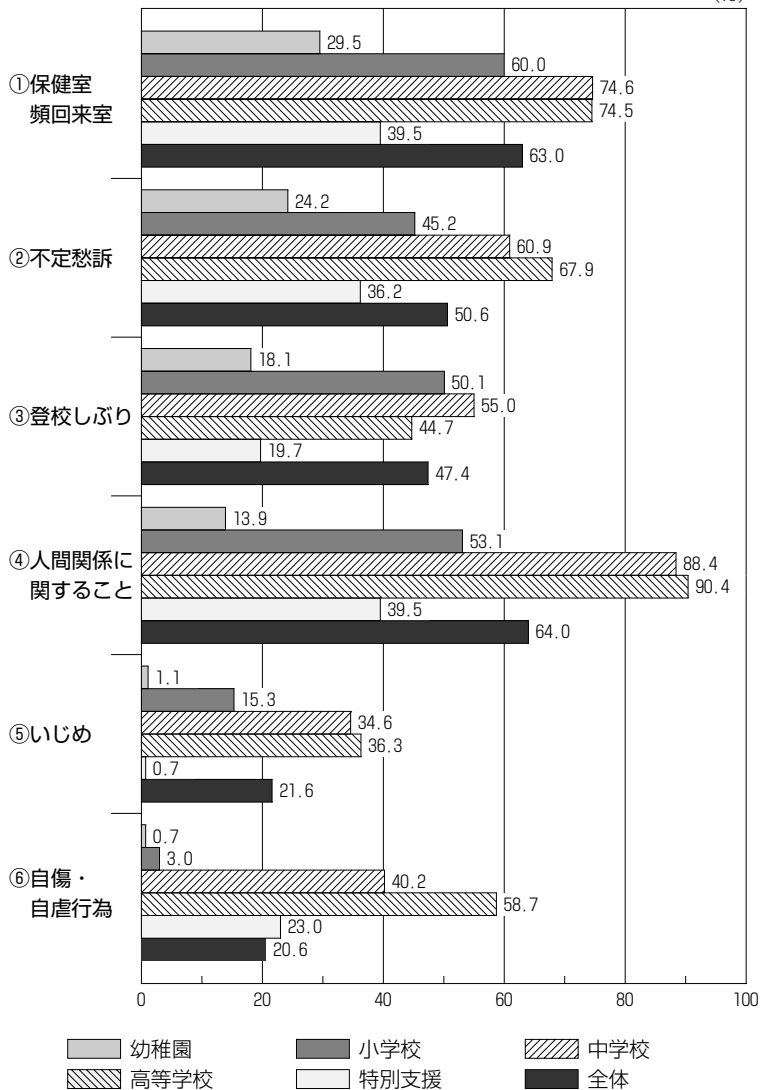
3. いじめ対応の実際

社会環境の急激な変化は、ストレス社会を生み、子どもたちの心身の健全な発育・発達を阻害している。ITの急激な発展は、いじめの構造を変え、従来の校内や登下校時を中心とした仲間はずれや悪口、無視、恐喝等の行為から、メールやブログなどIT機器を媒介としたものに発展し、発見を困難にしている。近年、いじめに起因すると思われる「登校しぶり」や自殺などが報道されるたびに陰湿さがクロージアアップされている。

養護教諭は、毎日繰り返される子どもたちへの

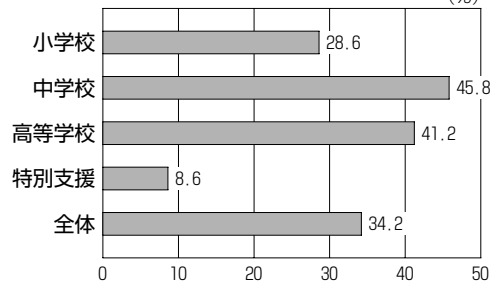
■養護教諭が継続的に行った健康相談活動

(%)



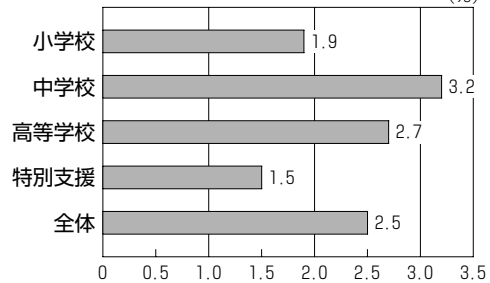
■保健室登校の児童・生徒がいた学校の割合

(%)



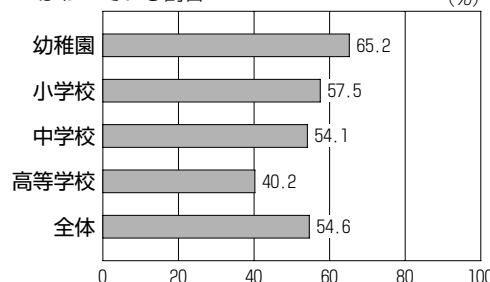
■1校あたりの保健室登校の児童・生徒数の割合

(%)



■特別な支援が必要な園児・児童・生徒に直接か
かわっている割合

(%)



平成18年度「養護教諭の職務に関する調査」(全国養護教諭
連絡協議会)

対応の中から、主訴・しぐさ・表情等で瞬時に状況を判断し、心に問題のある多くの子どもを救済してきた。保健室来室者の4割が心の問題であるという報告もある。平成18年度の調査では、中学・高校の35%の養護教諭が継続的にいじめの対応をしている。

養護教諭は、健康教育のコーディネーターとして保護者や教職員からの健康相談も多く、保護者からは、①心身の健康に関すること ②登校しぶりや保健室登校に関すること ③友人、部活動、学校生活に関すること等の相談がある。また、教職員からは、①心身の健康に関すること ②登校しぶりや保健室登校に関すること ③児童生徒とのかかわりや指導に関すること ④発達障害に関すること等の相談が寄せられている。

いじめ等の心の健康問題においては、児童生徒のみならず、保護者や教職員からも養護教諭の役割の重要性が再認識されている。

4. いじめと健康教育

保健室は、すべての子どもにとって「心の居場所」でなければならない。そして、養護教諭の役割は、「からだ・こころ・いのち」の教育を通して、子どもたちの生命尊重の精神や自己肯定感を育てるとともに、いかに社会が変化しようとも子ども自らがこの社会をたくましく生き抜く力をつけることにある。

「大切な命をどう生きるか」—加害者・被害者をつくらぬキーワードは、養護教諭が中心となって実践している健康教育にある。(おりがさ・けいこ)

子どもの気持ちを受け止められる大人でありたい

～「チャイルドライン」の現場から～

チャイルドライン支援センター常務理事
よこはまチャイルドライン代表

徳丸 のり子



はじめに

チャイルドラインが日本に生まれて、もうすぐ10年。現在、33都道府県で62団体が活動するまでになりましたが、「ひたすら子どもに寄り添い、子どもの気持ちを受け止める」というチャイルドラインの基本理念は変わりません。ですから、大人の価値観を押しついたり、お説教したり、ということはありません。昨年度の電話件数は、ついに13万件を超えました（資料参照）。これはとりもなおさず、「子どもたちの周りに話を聴いてくれる大人がいない」「子どもたちの切実な声を受け止めるシステムの構築が急務」ということを物語ります。

チャイルドラインは「居場所ライン」

チャイルドラインにかかってくる電話の内容は、他愛ない雑談からいじめなどの深刻なものまで、実にさまざまです。無言電話が多いのも、チャイルドラインの特徴とっていいでしょう。チャイルドラインはこの無言電話をととても大切にします。いじめや不登校など、内容が深刻であればあるほど、子どもたちはすらすらとは話せません。ためらい、大人を試し、ほんとうに自分を吐露しているのを見極めてからでしか、真実は語らないとっていいでしょう。しばらくの無言のあと、「クラスみんなに無視される。もう死にたい」と、消え入りそうな声で話しはじめます。受け手はまず、子どもの気持ちを受け止めます。「それはつらいね。みんなに無視されるなんて、考えただけでもつらいわね。もう少し、話をきかせてくれるかな」

気持ちをわかってもらえると、子どもはそれだけで安心し、自信なげだった様子が生き生きと変わりはじめ「どうしたらいいか」を考えようとす

る勇気が湧いてきます。そしてもちろん、受け手も子どもとともにこれからのことを考えていくのです。

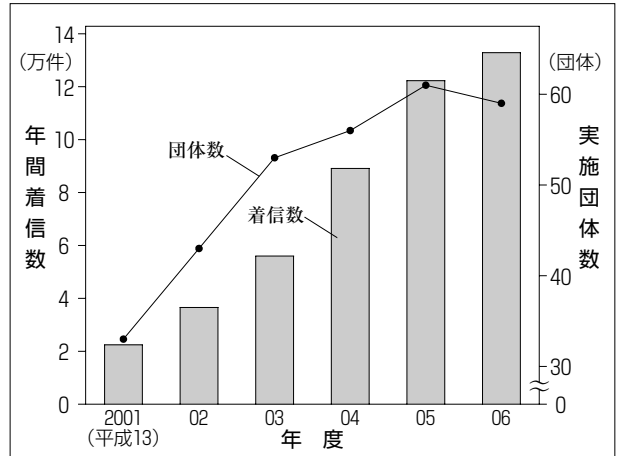
「たしかに、子どもたちに『死にたい』と言われると、たじろいでしまいますが、今のマスコミや大人は言葉に反応しすぎだと思いますね」（受け手、45歳）

チャイルドラインでは、言葉の奥にある子どもの気持ちを聴く、ということを大事にしているのです。たとえ子どもに「死にたい」と言われても、まずそれを冷静に受け止め、「死にたいほどつらくて悲しいんだな」と、その子の思いに寄り添います。子どもは言葉が未成熟で、自分のつらさやさみしさをどう表現したらいいのかわからない子どもも多く、マスコミで「死にたい」「自殺」などの言葉が多用されると、簡単にまねて使ってしまうこともあります。なんとなく苦しい気持ちを「死にたい」と表現することもあるでしょう。つまり、「冷静な判断（頭）」と「あたたかいところ」で対応することが電話の受け手に求められます。

これまでの電話相談の多くが「問題解決型」なのに対して、チャイルドラインはその性質を異にしています。悩みがなくても電話していいし、ただひたすらおしゃべりしてもいいという、子どもにとっての「居場所ライン」なのです。もちろん、そういう中からいじめや虐待などの話も出てきますし、いやもしかしたら、子どもの場合、そういう中からしか本音は出てきにくいといえるかもしれません。

このことは、子どもの生きる現実社会で、子どもたちがありのままの自分、素の自分を出せなくなってしまっているということではないでしょうか。「名前はいわなくていい」「秘密は絶対まもる」という約束のあるチャイルドラインだから、子ど

【資料】 年間着信数と実施団体数の推移



(資料提供 チャイルドライン支援センター)

もは本音を言える。それはもちろんチャイルドラインの重要な使命ですが、ほんとうは、顔の見えるところで子どもとかかわることができれば、とチャイルドラインで電話を受けるだれもが思っています。

親や先生に話さない理由

「いじめで苦しんでいる子どもたちへ。だれかに相談してください」

近年、いじめが社会問題になったころ、多くの大人が子どもたちに呼びかけましたが、この大人の思いとは裏腹に、子どもたちはいじめのことをだれにも話さないことが少なくありません。ほんとうにつらいことは容易に他人には話せないものですが、先生に話したら「チクった」として、さらにひどいいじめが待っていることを子どもたちはいやというほど知っています。また、親に話さない(話せない)のは、子どもの自然な感情ではないでしょうか。親には「学校では明るく元気にやっている」と思われたいのが子どもの本音でしょうし、親の前でいじめを認めるのは、自立の過程でのプライドが許さないこともあるでしょう。さらに、大人に話すと「なんとかしてあげよう」という親や先生が問題をさらに大きくしてしまうこともあります。子どもたちはいじめの構造の中から容易に抜けられないので、子ども本人のつらい気持ちをくみ取ったり、どうしたいかを十分に話し合ったうえで行動を起こさないと、取り返しのつかないことになってしまいます。

子どもたちに「こころの応急手当」を

そうした、あまりに子どもに近い立場の大人、つまり親や担任の先生には話せなくても、ちょっと離れた存在の大人、例えば地域のおじさん、おばさん、親戚のおにいちゃんなど、子どもたちと「ななめの関係」でいられる大人(第三の大人)には、子どもたちはさりげなく本音を話すことがあります。自分に密接でないので、ありのままの自分をさらけ出しやすいのです。しかしそうした大人の存在は、子どもにとってなくてはならないにもかかわらず、子どもたちの育つ環境からいなくなってきたのが現状です。

そのような中であって、学校で子どもたちと「ななめの関係」をつくることのできる養護教諭

の果たす役割は大きいのではないのでしょうか。養護教諭には、けがや病気だけでなく、「こころの応急手当」をしてほしいと思います。いじめや虐待などを受けた子どもたちは、たとえほんとうの血を流していなくても、必ずこころの血を流しているのですから。

「こころの応急手当」とは、その子の気持ちを聴くということです。手当てはもともと、手を当てるということ。もし子どもが転んで足をけがしたら、手を当ててあげる。おなかが痛いといったら、やっぱり手を当てる。実は、その手を当てるということがどんな特效薬よりも力を発揮するのです。ですから、手間がかかるかもしれませんが、手を当てるようにしっかりと寄り添って、子どもたちの話に耳を傾けてください。そのような大人を、子どもたちはとても必要としているのです。

今、子どもたちは言葉と気持ちを尊重されていません。「こころの応急手当」は、尋ねることではなく、聞くことでもなく、「聴く」ことです。そうして気持ちを語ることができたときに、子どものこころの中に大きな癒しが起きていく。「ななめの関係」、つまり隣人として子どもの話を聴く、このとても単純な、けれどもたいへんにパワフルなこころの手当てこそ、今を生きる子どもたちのレジリエンシー(弾力性)を高め、子どもたちを元気にしていく最も効果的な方法ではないのでしょうか。日常の中で、ひとりの隣人として子どもの話を「聴く」ことのできる大人が日本中に500万人、1000万人と増えていったら、子どもの状況は大きく変わっていくことでしょう。そしてそれは、必ずや大人も住みやすい社会であることはいうまでもありません。(とくまる・のりこ)

子どもの心を開く 保健室づくりを!



東京都世田谷区立桜小学校養護教諭 関根 美香

はじめに

本校は今年、創立130周年を迎えます。親子三代桜小学校に通うという家庭も多く、地域に根ざした学校です。

「地域で子どもたちを育てていく」という意識が高く、地域主催の活動が多いのも学校の特色の1つになっています。

また、本校は昭和53年と平成16年に学校保健の分野で文部大臣賞（文部科学大臣賞）を受賞しており、健康教育に力を注いでいる学校でもあります。「健康・安全なくして教育なし」という教育理念のもとに学校教育が展開されております。

そういった学校で、子どもの心が解きほぐされ、子どものほんとうの声が聞こえてくる、そんな保健室づくりを目指しています。

1. 感覚にはたらきかける保健室づくり

人間は「五感の生き物」といわれ、さらに日本人は、最も五感に敏感な民族ともいわれています。五感のうちの味覚を除いた4つの感覚にはたらきかける、理屈ではない居心地のよさを保健室で感じてもらえたらと思い、1つひとつのものに私なりの思いを込めています。

保健室の基本的な機能性をきちんともたせつつ、空間から感じる癒しというものを大切にしていま

す。そのいくつかを紹介します。

①触感（さわる）

・ジェルジュム [写真1]

触った感触と形を作り上げていくことを楽しみます。

・モグシリーズ [写真2]

細かいビーズの感触に癒されます。

・ぬいぐるみ

話をするとき子どもたちはよく抱えています。

・折り紙

作り上げていく楽しみがあるようです。

②聴覚（きく）

保健室では、会話の邪魔にならない音量でいつも音楽を流しています。静かすぎると子どもの緊張を誘うことがあるためです。

③嗅覚（かぐ）

・アロマオイル

季節とその日の子どもの体調、雰囲気に合わせてアロマオイルを使っています。

④視覚（みる）

・モビール

天井からつるすデンマーク製のおもちゃ。空間に彩りと動きを与え、視覚を刺激し、癒し効果もあるといわれています。

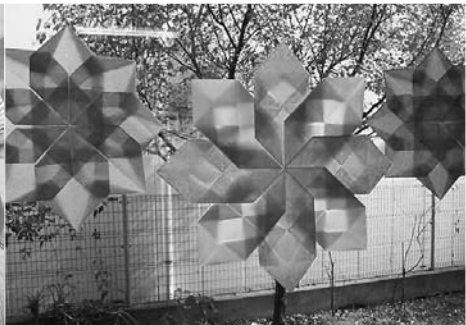
[写真1] ジェルジュム



[写真2] モグシリーズ



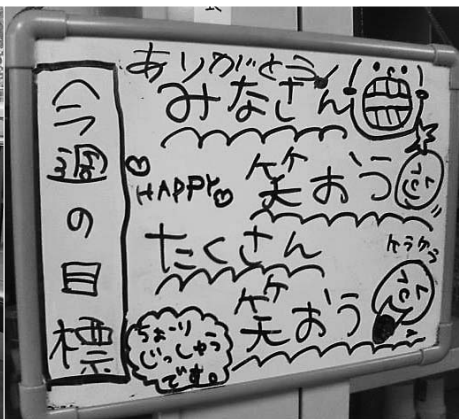
[写真3] トランスパレント紙を使った飾り



【写真4】「ホッとしたいスペース」



【写真5】「ほけんしつノート」の役割を果たすホワイトボード



【写真6】「表情ポスター」を利用して



・トランスパレント紙 [写真3]

ドイツで凧を作るのに使う紙です。透ける感じが美しく、きれいな幾何学模様を作ることができます。子どもたちと一緒に作ります。

2. 目的別のスペース（コーナー）を作る

以上のように感覚にはたらきかける工夫をしつつ、明確な目的別にスペースを作ることも大切です。処置コーナーや測定コーナーのほかに「読書スペース」や「ホッとしたいスペース」[写真4]、さらには、「思いをかくスペース」を設けています。

このスペースで子どもたちは「ほけんしつノート」に自分が思っていることを絵や文字で自由にかくので、それについてコメントを書きます。子どもたちと養護教諭の交換日記のようなものです。「ほけんしつノート」のほかにホワイトボードを利用することもあります [写真5]。

また、保健室の壁に「表情ポスター」を掲示して「今の気持ちは○番!」、「先生は○番の顔をしていたよ」といったように、表情から相手の感情を読み取ったり、自分の今の気持ちを言葉に表したりするコミュニケーションスキルトレーニングを行っています [写真6]。

このような空間で、子どもたちは次第に心を開いていき、本音の言葉を残していきます。その言葉を拾う感受性を、私たち養護教諭はいつでももち続けることが大切なのではないでしょうか。

また、子どもの心に寄り添い、子どもが心地よいと思える空間とモノに出会えるように、いろいろな個展に出かけていくこともあります。

そして、何よりも大切なのは、私たち養護教諭自身の心と体が健康であることといえましょう。もちろん、担任や専科の教員、スクールカウンセラーとの情報の共有も大切にならなければならない

ことの1つです。

3. 特別支援委員会

子どもたちが保健室で見せる顔、教室で見せる顔、教室以外で見せる顔を教職員全体で共通理解し、それぞれの場所での対応や支援のしかたについて、特別支援委員会で検討しています。

メンバーは、校長、副校長、主幹2名、特別支援コーディネーター（本校では「特別支援学級教諭」）、教育相談主任、養護教諭、スクールカウンセラーで構成されています。ケースによっては、担任に入ってもらうこともあります。

本校では特別支援コーディネーターの声がけのもと、月に1回校内委員会の時間をとっています（臨時で開催されることもあります）。

話し合った内容は、職員会議の後や職員ミーティングなどで報告したり、委員会メンバーのそれぞれの立場ごとに、学習支援・生活指導・教育相談・特別支援・保健管理・安全教育の中から、テーマを絞って事例提供したり、配慮の必要な児童や集団の指導などについて事例検討したりして、教職員全体の資質を高めていくことに役立てています。この会から、子どもをよく知ることもつながっていきます。

おわりに

このように、実践の一部を紹介させていただきましたが、居心地のよい空間づくりと、そこから生まれる『子どもたちの言葉』、『先生方から得る子どもたちの言葉』をていねいに拾うことを心がけ、子どもをいろいろな角度から理解し、保健室での対応に生かしていける保健室づくりを目指しています。

子どもたちが大人になったとき、記憶の片隅にそっと残っているような、そんな保健室でありたいと願っています。
(せきね・みか)